

『ウルフ・オブ・ウォールストリート』

原題 The Wolf of Wallstreet



映画批評

『ウルフ・オブ・ウォールストリート』 ～ポップカルチャーで描く金融業界

塚田三千代 (翻訳家/映画アナリスト)

©m.tsukada 2014/2/21

本映画はジョーダン・ベルフォート著「ウルフ・オブ・ウォールストリート」に基づいた作品。1880-90年代のウォール街で、26歳の株ブローカーが金儲けを欲する仲間を集めて証券投資会社を設立する。億万長者に登りつめるが、その巧みな電話のセールストークや不正なマネーロンダリング疑惑などで当局に監視され、ついに裁判で司法取引に応じた。そして22ヶ月服役後に経営コンサルタントとして社会復帰する。その10年間(1987-1996)を回想したベルフォート自身の回顧録をもとに映画化している。勸善懲悪主義の人にとっては、本映画はまったくナンセンスであふれるばかりの皮肉(stire)で描いた映画だと苦笑するだろう。しかし_____。

映画の中での事実の描かれ方は軽快でスピード感にあふれて、コミックのような動きや明るいタッチで描かれているが、内容は決して子供向きではなく判断力をそなえた成人向きである(R18+指定)。闇の部分の描き方はフィルムワールの薄暗い色調ではなく、太陽の下にすべてを放り出した明るい色調で鮮烈である。乱交騒ぎの静止映像はまるで絵画の巨匠たちが描いた名画の一部を切り取ったように美的でさえある。

『ウルフ・オブ・ウォールストリート』は金融業界の光と影の舞台を描いて成功しているといえよう。株仲買人(ストック・トレイダ)、指人形(借株売買人)と

して、強欲と野心に溢れる若者たちが叫ぶ咆吼の間を飛びかう卑語や悪態語は、株価(数字)と戦う闘士そのものの言葉である。

株式トレイダの心理的ストレス、胃痛や腰痛、脳内麻痺を沈める抑止処方、ボードルームに並んだコンピュータのモニタが点滅して瞬時に入れ替わる数千桁の数字に反応する神経細胞、強力な刺激で脳内麻痺を沈静させたり狂乱させたりするための対処法——その映像はすべて地下の薄暗い照明の下ではなく高層ビルの空につながる巨大な硬質ガラス窓に囲まれた広大な室内で進行する映像シーケンスである。エレベーターも密室ではなく地上からも透けてみえ、この狂騒がいわば影でなく光として演出されている。

実体のない数字と眼の前に実在する事物。容易に手に入るものと入らないもの。それらを周辺にする 1980-90 年代の一つの事象があった。つまり、ロングアイランドを拠点にして世界一の金融業界たる N.Y.ウォール街で実際に起きた事柄は、けっして茶番劇として捨て去れぬものがある。それはベルフオート自身から次世代へ贈るメッセージである。

A message from none other than Jordan Belfort himself.

まさに“映画メディアは社会を映す鏡”である。マーティン・スコセッシ監督は金融市場という空間の中に人間存在の抗争と批判を持ち込んで、すべてをポップ・カルチャー手法で描いたのである。

演技派俳優レオナルド・ディカプリオは、金融界の寵児を極めたジョーダン・ベルフオートの多様な変容を演じている。—24 歳でウォール街の投資銀行に就職、ブラックマンデー、銀行倒産、失業、郊外の投資センターに再就職、31 歳でストラットン・オークmont 会社を創業、ウォール街へ進出達成。セックス / ドラッグ依存症、巨額な財産の蓄積、証券詐欺で逮捕・投獄される。

この社会の光と闇を経験したジョーダンの虚像と実像を、ディカプリオは顔の表情と聞き手を引きつけて決して離さない巧みなプレゼン・スピーチで演じきっている。

相手の心底を探る顔や秘蔵ドラッグを憧憬する無邪気な顔、無二の友との決別で見せた顔が印象に残るが、これを演じられるのもディカプリオならではの。ジョナ・ヒル(ドニ・エイソフ役)と阿吽の呼吸で演じて見ごたえする。

【語句に見えるポップ・アートの感性】

米語の卑語や俗語やドラッグ語句を連発し、映像はポップ・アートの感性である。

- 1 株セールスの秘訣を教える時のセリフ
 - － 相手に信頼感をもってもらい、その日のうちに売買させる
 - － 今日やることは俺が教えた言葉を使え。
金持ちにしてやる
 - － ビジネストークでは、顧客より先にしゃべるな
 - － 勝ちレースに乗れ
 - － 10 万ドル稼ぐまで電話テロリストになれ
 - － 必要経費(business expense) / 交際費で調達
- 2 セールストークの力強いプレゼン
 - － このペンを俺に売ってみろ(映画の前盤で)
 - － あなたはこのペンをどう思いますか(映画の終盤で)
- 3 社員の士気を鼓舞するベルフォートのスピーチが社員みなを虜にする。
 - － 僕はやっぱり皆のために退任できない。
 - － 僕を目標にさせたい。I love all.
 - － 全米1%の金持ちだけを相手にする会社にする
 - － メリルリンチは何だ。我社を宇宙にまで高める。
- 4 忠誠と信頼 (loyalty and abomination)を大切にする。
- 5 レモン 714 の効力に魅せられて止められない。
- 6 決別のとき...
司法取引に応じたジョーダンが盗聴器と GPS を着用して、今はストラットン・オークmont会社の社長を務める無二の友ドニに会いに来た。「俺はいらん。好きだろ、食べるよ。」といって寿司弁当のブリを指すシーンである。このシーンを、ジョーダンがドニに最初に出会ったときのクラックを飲用して歓声を

あげて太陽がさんさんと照らす並木路を疾走するシーンに重ね合わせると、じつに対照的である。状況の異なる環境で強くなる友情の絆とは…。

Book Review

It's an extraordinary story of greed, power, and excess that no one could invent: the tale of ordinary guy who went from hustling Italian ices to making hundreds of millions—until it all came crashing down. —The New York Times

In this tale of late-twenties-century American greed, Belfort demonstrates that whether the market be bear or bull, it's the wolves that make it interesting. —Hampton Street

For those not completely familiar with Wall Street, this is an important read. Think of it as a tour of the sort of underbelly of the financial market scene, the dark side of which, in some form, is always out there. For those more experienced, this can be, plain and simple, a fun read. —The Street



【映画情報】

2013年1月29日(金)より 全国公開

公式サイト:www.wolfwallstreet.jp

配給 パラマウント ピクチャーズ

(C)2013

監督:マーティン・スコセッシ

製作:マーティン・スコセッシ

レオナルド・ディカプリオ

リザ・アジズ

ジョーイ・マクファーランド

原作:ジョーダン・ベルフォート著「ウルフ・オブ・ウォールストリート」(ハヤカ
ワ・ノンフィクション文庫)/Jordan Belfort. The Wolf of Wall Street. 2013

Bantam Books Trade Paperback Edition. N.Y.

出演:レオナルド・ディカプリオ

ジョナ・ヒル

マーゴット・ロビー

マシュー・マコノヒー

ジョン・ファブロー

受賞:

ゴールデン・グローブ賞最優秀主演男優賞受賞(レオナルド・ディカプリオ)
第86回アカデミー賞で作品賞、主演男優賞(レオナルド・ディカプリオ)、助
演男優賞(ジョナ・ヒル)、監督賞(マーティン・スコセッシ監督)、脚色賞(テレ
ンス・ウィンター)の主要5部門でノミネート。

2013 年製作 / アメリカ / 英語 / カラー / 3 時間

R18+指定

D: フィルムを使用しないで、すべてをデジタルプロジェクターで上映する方
式。スタジオ録音そのままの非圧縮サウンドと鮮明な映像を楽しめる。

ジャンル:経済・株市場/ドラマ